資　料

パ　　リ
―― 誕生から現代まで ――
［XXVII］

P.クールティヨン　著
金　柿　宏　典*　訳注

第 3 共和政（2）

パリ・コミューヌ[1)]

1871 年 3 月 18 日から 5 月 28 日まで、短期間だったが，首都にとっては長かったこの時こそ，創設以来パリで勃発した最も恐ろしい暴動だった。抵抗，政治的行政的行為，虐殺，すべてが「現状」statu quo を覆したのである。それはパリ・コミューヌと命名された叛乱である。労働者，市民，革命家あるいは単なる自由派，左翼のインテリたちは「連盟兵」les fédérésと自称し「ヴェルサイユ派」に対抗した。ヴェルサイユ派とはヴェルサイユに撤退した軍事力を持っていた文民政府で，彼らは連盟兵たちを「コミューヌ派」les communards と呼んでいた。コミューヌ派は赤旗を採用し，革命暦を復活させ，合法的政府として振舞っていた。

叛乱はどのようにして勃発したのか？

ドイツ軍がシャン - ゼリゼを占領しに来ることを知って，降伏後も武器を保有していた国民衛兵のある者たちが，モンマルトルの丘に保管されている大砲を捕獲しようとした。暴動を恐れていたティエールは，「自分たちの政府を組織したと自称している」国民衛兵

* 福岡大学名誉教授

軍中央委員会[2]を脅迫して，これらの火砲を確保するように複数の連隊に命じた。人々は大砲が奪われるのを妨害するため，バリケードを急造する。部隊はモンマルトルに対しルピック街[3]から攻撃しようとした。しかしこの地区の女性や子供たちが抵抗する人たちにまじっているのを見て，兵士たちは上官の命令に従わず，双方の兵士たちは人々と親しくなってしまう。ルコント[4]とトマ[5]の2人の将軍は逮捕され，ロジエール街の庭で銃殺されてしまった。

こうして叛乱の第2期が始まる。政府がパリを捨てヴェルサイユに去ったため，中央委員会は1871年3月17日から19日の夜の間に市庁舎に入り，選挙の準備にとりかかる。革命に突入するため合法的範囲から人々は逸脱してしまったため，折衝は困難を極めた。3月27日，月曜日，結果が報告された。市庁舎の前は，銃剣の上に軍帽を載せた小銃が林立し，その間を伝令が行きかっていた。馬の尻毛を飾った略帽をかぶり，真紅の大きな外套をまとったガリバルディ―の支持者，作業衣の下から長く出した襟なしの青いシャツを着て，エナメル帽をかぶった船員などもいた。休憩している部隊の正面に，色とりどりの服を着た酒保の女たちが機関銃に倚り懸っている。演壇を前にして，群衆はぎっしりと密集し，無言で物思いに耽っているようだった。

発射された3発の空砲の音が，議長の振鈴の音にかわる。委員会のメンバーの一人が，人民の代表の名を読み上げる。「コミューヌ萬歳！」太鼓の連打，マルセイエーズ，「出征の歌」が合唱され，赤旗がふられる。コミューヌが宣言されたのである。

パリの周辺で武力衝突が起きる。バリケードの上で威勢よく煙草を巻いていたドムブロウスキー[6]（彼はモンマルトルのミラ街[補注1]のバリケードの上で瀕死の重傷を負うのだが），彼の指揮するコミューヌ部隊は防衛体勢に入った。5月16日，午後5時，芸術家委員会長にギュスターヴ・クールベが就任し，「野蛮な力と偽の栄光の象徴であり，友愛への攻撃」であるヴァンドーム広場の円柱が，その頂上に立っているナポレオン像と共に打ち倒される。[7]ジュール・ヴァレスはここからオードを作る。

「我らの怒りが破壊した青銅の巨人は，
横腹の大きな亀裂を鴨の目に曝している。
唾を吐きかけよう，貧しい我らすべてに強制し
頂上に登るため4スーを掠奪したこの像に。」

しかし情勢は不安定になる。フリーメイソンは切迫した虐殺を中止させたがった。[8]クリュズレ将軍[9]は束の間の休戦を得ようとしていた。連盟兵の最も過激な一派に彼は逮

捕され放逐されてしまう。コミューヌ派は赤旗が三色旗に代った要塞を放棄しなければならなかった。5月21日午後4時，ヴェルサイユ派の部隊がサン‐クルー門からパリに侵入した。[10]

それ以後，事態は危険な展開をみせる。ヴェルサイユ派と少しでも関係ありと疑われた者は逮捕される。そして情容赦なく処刑された。公安委員会が組織されていたにも不拘，2つの分派が既に叛徒たちを分断していた。一つは叛乱の勝利のみに専心しようとする者，もう一つは「48年派」quarantehuitardsで，彼らは社会主義理論を直ちに実行しようとしていた。

こうしてコミューヌの第3期になる。即ち市街戦と「血の週間」である。5月21日日曜日，ジュール・ヴァレスが市庁舎で議長を務めていた時，ヴェルサイユ派がパリの城壁を越えたという知らせが入った。かくしてコミューヌの行政権は消滅し，軍事力の権威がマク‐マオンの部隊と共に到着したのである。22日，ヴェルサイユ派の部隊は，クールセル広場[11]から，サン‐ラザール[12]，マレルブ通り[13]，シャン‐ゼリゼのロン‐ポワン[14]，下院議場[15]，モンパルナス駅[16]にわたる包囲網をつくり展開した。23日，モンマルトルは頑強な抵抗にも不拘占領される。

こうして敗北を感じたが故に，連盟兵は怒りに身をまかせる。彼らは会計検査院[17]，レジオン・ドヌール会館[18]に放火する。ショデーは元パリ市助役で市庁舎を管理していたが，1871年1月22日，サント‐ペラジ刑務所[19]の中庭で処刑された。大混乱の中で起こったのは，虐殺，放火，救急の応急手当，銃殺，そこかしこで繰り広げられた復讐だった。ラウール・リゴー[20]は新聞記者でコミューヌの検事だったが，チュイルリ宮とパレ‐ロワイヤルの放火を命じたため，ヴェルサイユ派の部隊に逮捕され，ゲー・リュサック街[21]で殺害された。「憲兵を殺せ！　司祭を殺せ！」。これが連盟兵の叫びの一つだった。パリ大司教ダルボワ猊下[22]は，ラ・ロケット刑務所の巡回路上で司祭や修道士たちと共に銃殺された。市庁舎にも火が放たれる。25日，左岸地区全体はヴェルサイユ派の軍隊に征圧されたが，シャトー‐ドォ[23]では依然として戦闘が続いていた。コミューヌ派は，最後の司令部をヴォルテール広場の第11区の区役所，ポパンクール区役所[24]に設置した。民間人の軍事代表ドレクリューズは，バリケード上で戦死した。それは恐ろしい殺戮だった。パリの社会主義者たちは一寸刻みで防衛した。人々は裁判もなくでたらめに銃殺された。アクソ街[25]では52名の人質，憲兵，司祭，役人たちが一団の連盟兵により至近距離から射殺された。27日，ヴェルサイユ派はビュット‐ショーモン[26]とペール‐ラシェーズを

占領する。28 日，最後のバリケードが陥落し，マク‐マオンは，次のような布告のビラを貼り出す。「パリの住民の皆さん，フランス軍が貴方たちを救出に来ました。パリは解放されました。我が兵士は 4 時に叛乱分子が占據していた最後の場所を攻略しました。今日で戦闘は終了し，秩序，労働，安全が再生するでしょう。 —— フランス陸軍元帥，司令官，マジャンダ公爵，ド・マク‐マオン」。しかし恐ろしい鎮圧は，アンリ・ロシュフォール[27] が元帥に与えた綽名 Mache-la-Honte が正しかった事を証明するだろう。「贖罪は，とティエールは言った。完全になるだろう。それは法の名により，法により，法と共に行われるだろう。」

この血の週間の間，男，女，子供を含めて 3 萬 5 千人が銃殺された，とペルタン[28] は指摘している。4 萬人の逮捕者がでる。逮捕された人たちはパリ市外の地方のいたる所へ連行された。1879 年になっても判決が下されていたが，その時ジュール・グレヴィがマク‐マオンに代って共和国大統領に就任し，議会が 1880 年 7 月 14 日の大赦令の前に一部の人々の恩赦を議決した時であった。またその法令が公示された日は，共和国が制定した国の祝日を初めて祝った日でもあった。

すべてが過ぎ去った今，パリの歴史の中でも大文字で記される頁の一つであるパリ・コミューヌについて，如何なる客観的見解を持つべきだろうか？ 3 月のある朝モンマルトルで開始された銃撃戦で始まり，5 月 28 日の午後に最後のバリケードが陥落して終了したこの叛乱，その中にはエチエンヌ・マルセルの謀叛，フロンドの乱，恐怖政治，1848 年の興奮のすべてが同時に存在するのだが，この叛乱は穏健派と同じく過激派のつくりだしたものだった。マルモタン医師[29] にとり，コミューヌ派は「無能力者でもなく，盗賊でもなかったが，混乱を起した連中」だった。ティドール・デュレ[30] によれば，これらの男たちは「暴力的で過激で，王政と教会の支配への回帰を危惧していた」のである。ある人々にとって，コミューヌ派は共和政を救ったものであり，他の人々にとっては，コンコルド広場のバリケードの上で狙撃していたクララ・フールニエや赤い処女マリ・ギャールの様に，「サラマンドルそっくりの悪魔のような存在」で，放火をする女たちがいる「一味」だったのである。「死ね！ 此処で！ 今すぐ！」と叫びながら貧しい女が獵騎兵の伝令に飛びかかった場景をナダールは記憶している。「爪を剥いでやるぞ！」と金切り声で叫んだ女の声は忘れられなかった。しかしペール‐ラシェーズの墓地には「連盟兵の塀」がある。この塀を背にしてコミューヌ叛徒たちは銃殺されたのだが，これらの男全員は髭がのび髪ももしゃもしゃに乱れていたが，「共和政には無限の愛を抱いていた」ので

ある。彼らについて，警察と銀行の敵であり，モンマルトル部隊の一部となっていたバティニョルの小学校教師だったルイーズ・ミシェル[31] は，次のような追悼演説をしている。「コミューヌの死者たちはいたる所の小公園の中に，街路の敷石の下に，井戸の中に，プロシャ軍の攻囲の時に掘った塹濠の中に，墓地の穴の中に，彼らが焼き殺された陣地の中に在る。死体は馬車でシャン‐ド‐マルスに運ばれ，そこで一様に焼かれた。遺灰は骨壷に納められず，それを吹き散らした風は彼らの名も言わず，その数も語らない。」

（続く）

パ　　リ
―― 誕生から現代まで ――
（訳　注　XXVII）

1）La Commune de Paris：1871 年 3 月 18 日から 5 月 28 日まで，パリに成立した革命的人民政府。1870 年 9 月 2 日，ナポレオン 3 世の降伏により第 2 帝政が崩壊するや，4 日パリでは労働者，一般市民の要求に依り共和政が宣言された。彼らはプロシャ軍との戦闘継續を熱望し，国民衛兵軍に応募し，祖国防衛の決意を表明した。他方ブルショワジーを主体とする国防政府は労働階級の武装化に不安を感じ，また圧倒的なプロシャ軍の武力を前にして無益な抗戦継續はいたずらに多大の損害を出すという客観的理性的判断により，休戦ついで講和条約締結に踏み切り，平和と秩序の再建に努力しようとした。国防政府のかかる態度は卑怯な賣国的なものとパリ市民は映じた。こうしてヴェルサイユに移転した国防政府を否認し，パリ市民自身による自分たちの政府を樹立したのがパリ・コミューヌである。普通選挙によって議員を選出し，議会を構成し，その中から代表を選び内閣を組織した点は，一応合法的手順を踏んだものといえる。この新政府は従来のブルジョワ主体の政府と相異し，人民主体の民主主義的政体であった。社会改革の意志は当然ながら持っていたが，家賃支払い猶予とか短期債権の賣却や労働者の夜間就業禁止とかの些末なことばかりであった。しかし人民軍の創設，警察の廃止，官僚の公選制など施策は実行に移されなかったけれども，パリ・コミューヌならではの政策だった。しかし経済政策の不徹底，地方農民との連携の努力はなく，指導者間の対立が烈しくて軍事作戦面での統一もみられず，ヴェルサイユ政府を追撃捕捉して撃滅する機会を逸してしまった。この間にティエールを指導者とするヴェルサイユ政府はプロシャ軍の援助もうけて軍備を整え，一気にパリ市中に突入し，僅か一週間でコミューヌ派を全滅させ，フランス最初の人民政府を打倒したのである。マルクスとレーニンはこの内乱の歴的意義を確認し，その失敗を教訓にしてロシア革命を成功に導いたのである。

2）国民衛兵軍中央委員会：プロシャ軍のパリ入城の噂が，それまでのパリ市民たちの動揺と混乱をさらに激化する恐れもあったため，20 区の代表者が集合しその対策を話し合った。その結果，パリ全市に組織を持ちかつ武器を所有している国民衛兵軍を中核とした行政体制を確立する事になる。こうして結成された国民衛兵軍中央委員会がこれ以後ヴェルサイユに撤退してしまった国防政府に代り，パリ市の統治にあたり，普通選挙を実

施，議会を立ち上げ，パリ・コミューヌの成立までその任を果すのである。

3）rue Lepic：パリ第18区にあり，クリシー大通りとラ・ミール街を結ぶ長さ755米，幅10から14米の街路。旧モンマルトル村の村道だった。この街路は徴税請負人のブランシ柵門からモンマルトルの丘の頂上まで通じていた多くの小道を整理拡張し舗装して完成した。出来上がった道は「新道」le chemin Neuf と呼ばれたが，1852年に「皇帝」l' Empereur 通りとなり，1864年にルピック将軍（1765－1827）の名を取って現在の名称になった。17世紀頃からこのルピック街とジュノー大通りにかけ，多くの風車が立ち並び，モンマルトル大通りから見上げると，その日の風向きがわかったそうである。56番地に画家のゴッホが弟のテオと1886年から88年まで住んでいた。112番地にはコミューヌの間の72日間第18区の区長を務めたジャン‐バティスト・クレマンが1891年に住んだ。彼は亡命先のブリュッセルでシャンソンの名曲『さくらんぼの実る頃』*Au temps des cerises* を書いた（1867）。1885年彼がシャンソンを一冊に纏め出版した時，この本を「1871年5月28日，ラ・フォンテーヌ‐オ‐ロワ街のバリケードの従軍看護士，勇敢なる女性市民ルイーズ」に捧げている。

4）Claude Martin Lecomte（1818－1871）：サン‐シール士官学校つぎに参謀本部兵器実習学校で学び，多くの戦役に従軍，イタリヤ遠征後に大佐に昇進，普仏戦争の初期に第1歩兵連隊を指揮，1870年9月3日に少将に昇進，デュクロ将軍（1817－1882）のパリ第2軍に所属し，プロシャ軍の包囲突破作戦に参加した。フランスの降伏後，彼はラ・フレーシュ兵学校校長として赴任するばかりだったが，1871年3月17日から18日の夜にかけ，モンマルトルの丘に保管されている171門の大砲を引き上げる命令を受けた。その頃パリはプロシャ軍入城の噂で不穏な空気が充満していた。この大砲捕獲のニュースは国防政府がパリを非武装化するための陰謀だとパリ市民を刺戟してしまった。さらにその上にヴェルサイユ派は王政復古を企図しているという噂がいっそうコミューヌ派を激昂させた。大砲を曳く馬車の用意をしなかったという大失策でルコントの指揮する収容部隊は立ち往生し，そのうち噂をききつけた住民たちが続々と集合，彼らを取り囲んでしまう。兵士たちは上官の命令に背き群衆に発砲せず，阻止しようとしていた国民衛兵と合流してしまった。ルコントはコミューヌの地区委員会のあったロジエール街の邸に連行され，怒り狂った数人の男たちに庭の奥に連れだされ，トマ将軍と共に銃殺されてしまった。この事件がヴェルサイユ派との戦闘の口火となった。後の国民議会はトロシュ将軍の提案により，ルコント将軍の未亡人と家族に国家から年金を支給する決議をした。

5）Clément Thomas（1809－1871）：フランスの政治家，共和派の下士官として，7月王政下で何度も政治裁判の被告になり，有罪判決をうけサント－ペラジ刑務所に投獄されたが（1835），数人の囚人と共に脱走しイギリスに亡命した。オルレアン公結婚による恩赦（1837）で帰国，「ナシオナル」紙の編集に参加する。1848年の2月革命で成立した臨時政府は彼を反動勢力の強いジロンド県の政府代表に任命，立憲議会議員選挙（1848）で，トマは反動勢力を押えて当選した。パリに帰京した彼は，国民衛兵第2軍大佐に就任，5月16日の争乱の時に議場に乱入した暴徒を追い払い立憲議会を救助した功により，セーヌ県国民衛兵軍司令官に昇進する。第2帝政時代はベルギーに亡命，帝政崩壊後の1870年9月4日に帰国，再び国民衛兵軍の指揮を執った。1871年1月19日，プロシャ軍の包囲突破作戦を指揮したが失敗，軍上層部の無気力に落胆し，司令官トロシェ将軍に辞表を提出，引退してしまう（1871.1.14.）。3月18日，パリで騒乱が勃発，彼の昔の副官がコミューヌ派に逮捕されたのを知り，その釈放のため，平服のままでモンマルトルに赴いた。彼の白髭でトマ将軍と認めたコミューヌ派の兵士が彼を裏切者として逮捕し，ロジエール街の6番地にあるモンマルトル地区委員会に連行した。そこで見せかけの裁判すらなく，即座に彼の死刑が決定され，庭の奥の壁の前に立たされ，至近距離から発射された弾丸で銃殺された。この処刑のすぐ後，同じ場所でルコント将軍も処刑された。国民議会はトマ将軍の遺族に対し年金支給を議決，国費で記念建造物を建設した。フランドル産の大理石で高さ8米の記念建造物はペール－ラシェーズ墓地に完成，トマとルコント両将軍の遺品もそこに祭られた（1875.12.26.）。

2人の将軍が処刑されたロジェール街は，現在のパリ第18区のシュヴァリエ－ド－ラバール街で，1885年に改名されている。この通りの36番地にあった壁の前で彼らは銃殺された。彼らが最初に連行されたのは近くのクリニャンクール街42番地にあったダンス・ホール場の「シャトー・ルージュ」の建物で，ここに第18区の委員会が本部を置いていた。2人は形ばかりの裁判の後，再びモンマルトルの丘のロジェール街36番地まで連れ戻され，そこで処刑された。ジャック・イレレの『パリの街路史』の第1巻345頁にその銃殺場面の写真が掲載されている。軍服姿のルコントは腕組をして立ち，トマは大きな外套で身を包み，無帽だが，その白い髭が印象的である。

6）Jaroslav Dombrovski（1838－1871）：ポーランドの革命家。パリ・コミューヌの国民衛兵軍将軍。ポーランド貴族出身の役人の家に生れ，ペテルブルクの士官学校を卒業，カフカズで軍務についた後，ペテルブルクの陸軍大学で勉学（1859－61），この間にロシ

ヤとポーランドの革命家と知り合い，地下活動に参加，中央国民委員会の委員となり軍事組織の指導者になる。1862 年 8 月に逮捕され，死刑の判決を受けたが 15 年の徒刑に減刑され，シベリヤへ流刑となった。1864 年 12 月，ロシヤの同志の協力で妻と共に国外脱出に成功する。1865 年にパリに到着，ポーランドの亡命革命家団体に加入，逮捕と釈放を体験する。パリ・コミューヌの成立に協力，国民衛兵軍中央委員会と軍事行動に関して会議，彼は直ちにヴェルサイユに進撃してティエール一派を逮捕し，国防政府を解赦させ，選挙によって新政権の樹立を提案したが，残念ながら実現しなかった。もし彼の計画が実行されたら，ヴェルサイユ政府の当時の僅か 2 萬余の軍隊は，パリ・コミューヌ軍約 10 萬の前に敗北した事は明白だった。しかし委員会の不決断がこの千載一隅の好機を逃し，パリ・コミューヌの滅亡の遠因をつくってしまうのである。4 月 2 日彼は志願して国民衛兵軍に入隊，パリ防塞地区司令官，ついでセーヌ右岸軍事行動司令官としてヴェルサイユ政府軍と戦うが，5 月 23 日，バリケード戦で致命傷を受け戦死する。遺体はペール - ラシェーズの墓地に埋葬された。

7）1870 年 9 月 14 日，クールベは独裁のシンボルであるヴァンドーム広場の円柱を倒す許可を求めたが，その計画は未承認のままになってしまう。翌 71 年 3 月 22 日，参謀本部に行こうとした代表団の兵士と警備隊の間で銃撃戦が勃発，50 名以上の死傷者が出る事件が生じた。パリ・コミューヌが成立する。5 月 16 日，クールベの提案が承認され，彼の指揮の下に円柱打倒の作業が始まる。予想される土埃や散乱する破片を防ぐため，地面に藁が敷かれ，倒す方向の広場の側に防護柵が構築された。ナポレオン像は頭と胴体はひしゃげたが，他は粉々になった。1873 年 5 月 30 日，ナポレオン像と円柱は再建されるが，その費用はクールベが負担する事になる。35 萬フランという巨額な負債は，彼を破産させ命を縮めさせた。毀損した青銅の浅浮彫は鋳型が保存されていたので新しく製作され，180 段の螺旋階段は以前のものよりずっと軽くなったので，円柱の総重量は約 2.000 トン弱になる。なほクールベに関しては，〔ＸＸＩＶ〕の注 28 を参照されたし。

8）フリーメイソンは，コミューヌ派とヴェルサイユ派の調停役を果して平和を招来し，その功績を自分たちの発展に利用しようとした。フリーメイソンとコミューヌ派の代表団は白旗を掲げヌイイ大通りを前進し，クールヴヴォワ橋のヴェルサイユ派のバリケードに到着，敵陣にいるフリーメイソン会員のモンタンドン将軍に面会し停戦を要請する。代表団はヴェルサイユでティエールに会おうとしたが，彼は会見を拒否，代表団は何も得る事なく引き揚げざるを得なかった（4 .30.）。この時点でティエールはコミューヌ派を

殲滅し戦闘の勝利を確信していた。「ティエールは，発芽した社会主義の全部を，この機会に大地を火焔で焼いて根まで枯死させる重大な決意なのであった。これが三月十八日の彼らのパリ逃亡に，新たな意味を付けるものと成る。」（大仏次郎著『パリ燃ゆ』下巻 234 頁，朝日新聞社刊，昭 39）。

9）Gustave Paul Cluseret（1823－1900）：フランスの軍人，政治家。2 月革命の時は叛徒と闘う。クリミヤ戦争に従軍（1855），両シチリヤ王国征服のためのガリバルディ（1807－1882）の義勇軍に大佐として参加した。またアメリカの南北戦争には北軍の将軍として参戦している（1861－62）。第 2 帝政末期まで反政府運動を続け，普仏戦争の時，リヨンに赤色共和国建設を計画した（70）。第 1 次インターナショナルに加盟，パリ・コミューヌ第 2 次委員会の委員となり陸相に任命された（1871. 4 .16.）。しかしイシー要塞陥落の責任を問われ逮捕され（5 . 1 .），裁判を受けたが 5 月 21 日に釈放された。ヴェルサイユ派により欠席裁判で死刑の判決を下される。幸い国外逃亡に成功し，1880 年の大赦により帰国，トゥーロン選出の代議士として（1884—88），ブーランジェ将軍に賛同，また社会主意義のために活動した。『軍隊と民主主義』*L' Armée et la Démocratie*（1869），『回想録』*Mémoires*（1887）の著書がある。

10）サン - クルー門からのヴェルサイユ派の進入は，コミューヌ派の抵抗をほとんど受ける事なく実現した。しかし何故かくも容易に出来たのか原因は不明である。守備隊がいない，というヴェルサイユ派のスパイの通報とする説もあるが確証はない。サン - クルー門がヴェルサイユ派に占領されると，北隣のオートゥイユ門，パシー門などが順々陥落し，さらにグルネル橋が占領されヴェルサイユ派の軍隊は奔流のようにパリ市中に侵入した。5 月 21 日，快晴の日曜日は，パリ・コミューヌの流血の最後を告げる初日となる。

11）place de Courcelles：現在の地名としては存在しない。第 8 区から第 17 区に通じるクルーセル大通りは，長さ 1.285 米，最狭幅 36 米のパリ市西部の一部を囲む環状道路で 1863 年に完成している。この大通りは徴税請負人たちの造成した柵壁に沿って建設されたもので，入市税徴収の税関が，この大通りと市内の通りが出会う辻に設置されていた。東からプロスペル - グボー広場のモンソー税関，クルーセル街の出口のクルーセル税関，テルヌ広場のルール税関である。本文中のクルーセル広場はこのクルーセル税関前の広場を指したものと思われる。

12）rue Saint-Lazare：第 8 区と第 9 区にわたる長さ 1.066 米，幅 11 米から 36 米の道路。1763 年には既に記録にみえている。昔，ルール村とヴィル - レヴェーク村をポル

シュロン村に連絡していた村道で，1700 年頃からポルシュロン街道とかアルジャントゥーユ街道と呼ばれていた。現在の名になったのは 1770 年からで，この道路がサン - ラザール館にラマルチーヌ街などを通って行き着くためこの名がつけられた。この通りの 40 番地の家で，デュマ・ペールが有名な假装舞踏会を 1833 年 3 月 30 日に開催している。108 番地は，パリとペクを結ぶ最初の鉄道駅のサン - ラザール駅が建設され，始発列車が 1837 年 8 月 26 日に発車した。

13）boulevard Malesherbes：第 8 区と第 17 区に跨り，マドレーヌ広場からトックヴィル街とペルチェ大通りに至る長さ 2.650 米，幅 30 米から 48 米に及ぶ大通り。1808 年，当時の内相リュシアン・ボナパルトが立案，正式認証は 1808 年。工事は途中何度も中断，ナポレオン 3 世によって厳粛な貫通式が挙行されたのは，1861 年 8 月 13 日だった。この通りがまだ途中のアンジュー街までしか完成していなかった 1824 年に，それまで出来た道路を含めてマルゼルブ大通りと命名されたのは，ブルボン王朝に仕えた忠臣ギョーム・ド・ラモワニヨン・マルゼルブ（1721－1794）を記念してのことである。彼はルイ 15 世，ルイ 16 世に仕え大臣を歴任，大革命の時に亡命していたが，ルイ 16 世の弁護のため我が身の危険も顧みず帰国し，国王の弁護に熱弁をふるったが，この甲斐もなく彼自身 1794 年 4 月 22 日に反革命罪で処刑され，ルイ 16 世の後を追ったのである。この通りの開通により，幾つかの古い街が消滅，歴史的な邸宅も取り壊されたので，オスマン反対派は激昂した。又この通りの傾斜部分を地ならしするため，特に入市税徴収の柵壁外の新市街地の部分の土砂が，1862 年から 1866 年の間に約 40 萬立方米が除去された。この大通りは文化人も多く住み，マルセル・プルースト（ 9 番地），デュマ・ペール（10 番地），ピエール・ルイス（147 番地），ガブリエル・フォーレ（154 番地），カチュール・マンデス（160 番地）などがいた。

14）rond-points des Champs-Elysées：半径 80 米のロータリー。パリ第 8 区にあり，此処でシャン - ゼリゼ，モンテーニュ，フランクリン - ルーズヴェルト，マティニョンの 4 本の大通りが交差している。設計者はアンドレ・ルノートルで 1670 年の完成。当時はルール大通りの終点だった。国民公会はこの広場の中央にルソー像を，復古したブルボン王朝はルイ 15 世の像を計画したが，どちらも実現しなかった。1831 年頃に大きな噴水が建造されたが，交通の邪魔になるとして 1854 年に除去され， 6 つの小噴水がこの広場を現在も取り巻いている。14 番地にある家は 1900 年に財界人アンリ・ブランベルジェが建築したものだが，1826 年に創刊された「フィガロ」紙が入っている。

15）Chambre des députés：Palais-Bourbons を指す。パリ第 8 区のコンコルド橋を渡った正面に聳える。ルイ 14 世とモンテスパン夫人の娘ナント嬢ことルイーズ - フランソワーズ（1673－1743）はルイ・ド・ブルボン公爵と結婚（1685. 7 .24.），夫の死後莫大な遺産を相続した。友人のラセ侯爵の忠告で，彼の邸の隣りの土地に 1722 年に自分の宮殿の建設に着手，1728 年に完成したこの宮殿はブルボン宮と呼ばれた。彼女はこの宮殿で 1743 年 6 月 16 日に死去する。宮殿は娘たちが相続するが，ルイ 15 世が自分の名をつけたルイ 15 世（現在のコンコルド）広場を飾るために利用としてこの宮殿を買収する。1764 年にコンデ公ルイ - ジョゼフ・ド・ブルボンがこの宮殿を住宅用として購入，以後この宮殿はコンデ宮と呼ばれる。彼は大改修を加え，正面玄関前の庭を取り囲むように左右の翼棟を新築し，隣接しているラセ侯爵邸を買収した。侯爵邸はプチ - ブルボン宮と呼ばれるようになる。この建物は大革命時代は政府の所有となり，大きな応接サロンを会議場に改造した（1798）。他の部屋は古文書館（1799－1808）やエコル・ポリテクニックの校舎に利用された時もあった（1794－1804）。旧ラセ侯邸は土木工学校も利用している（1807－1814）。セーヌ川に面した部分が未完成だったので，マドレーヌ寺院を大軍団の栄光の神殿にしようと建造させていたナポレオンが，セーヌ川を挟んで相対するにふさわしい宮殿建設を考え，1806 年 11 月 22 日に起工式を行った。25 段の広い階段は，12 本のコリント式円柱に支えられたギリシャ式の柱廊に至り，コルト作の彫像で飾られた三角形の巨大な破風を持った屋上階が聳える。リュードやプラディエなど当時の名工たちが腕を揮った浅浮彫が装飾として取付けられ，その出来栄えは，遠く向い合ったマドレーヌ寺院に決して劣るものではなかった。王政復古となり，この宮殿は 1815 年頃にコンデ公に返還される。彼の死（1818）後，国がこの宮殿の一部を 550 萬フランで買収，議員たちが此処で休息できるようにした。1830 年，最後のコンデ公からこの宮殿を相続したオマール公から，国が残りの部分を約 504 萬フランで買収，これ以後は立法議会が使用する事となる。それに伴い大改造が実施され，旧い宮殿の面影はほとんど残っていない。

16）gare Montparnasse：最初のモンパルナス駅は第 14 区と第 15 区に跨るメーヌ大通り 35 番地から 36 番地にかけて建設された。完成は 1840 年 9 月 17 日である。これは最初の鉄道駅サン - ラザール駅完成から 2 年後の事である。しかしこの駅はやがて手狭になり，1852 年に現在のパリ第 6 区の「1930 年 6 月 18 日広場」に新築移転した。1895 年 10 月 22 日午後 4 時，グランヴィル発の特急列車が駅構内で停車せず，到着ホームを横切ってレンヌ広場に機関車が真っ逆さま落ち込んだ事故があった。この駅は 1898 年から 1900

年にかけて改築され，3つの駅に分離した。1番線は従来通り郊外線，2番線は幹線列車の到着ホーム，3番線は同じく発車ホームとなった。駅前の広場には欧州一高いモンパルナス・タウンが聳えて新しいパリの象徴になっている。高さ209米，52階建で，最上階のレストランからの眺望は絶佳である。

17）Cour des Comptes：パリ・コミューヌ当時は第7区アナトール-フランス河岸の5番地から7番地のオルセ宮 palais d'Orsay に在った。この建物は1838年に完成，外務省と商業省が入居する。1842年に会計検査院と国務院が代って入居する。しかし1871年5月24日，コミューヌ派の放火で焼失し，パレ-ロワイヤルに移転（1871－1910），その後第1区ガンボン街13番地に新築された現在の建物に入った。この財政に関する審査機関は1807年9月16日と28日制定の法律により設立され，王政時代にあった13の類似機関を統一したものである。1936年9月1日の法令により，会計検査院は4半期毎の国庫の支出を特に検査する。

18）Hôtel de La Légion d'Honneur：第7区リール街64番地に在る。ピエール・ルソーなる人物が，サルム-キルブルグ皇子フレデリック3世のために1782年から84年にかけて新築した邸で，皇子はアロイジュス・ド・フォーヘンツオルレン皇子と結婚した妹と同行しパリに上京，皇子兄妹がパリ滞在中の宿となったのである。サルム館 Hôtel de Salm と呼ばれたこの邸宅の主ルソーは莫大な借財を抱え，多くの債権者から借金返済の矢の催促を受けていた。1794年反革命分子として逮捕され，トローヌ広場で処刑されてしまうが，ロベスピエール失脚の僅か6日前の事だった。彼の死後，債権者は管理組合をつくり，動産はすべて売却，この邸を，1796年末に陸軍省の御用商人クロード・ラントローなる人物に貸した。この男は一時すごく金廻りが良く女優のランジュ嬢を囲い一日1萬フランの小遣いを与え，サルム館で豪華な宴会を開いていた。彼はバカテル城を信用買し，ボールガール伯爵と自称したが，偽札作りの罪と詐欺罪で逮捕され，懲役4年と晒し首の刑に処せられた。この邸は1804年にレジオン・ドヌール勲位局総裁ラセペード伯爵（1756－1825）に売却された。ラセペード伯は1803年に総裁に任命され，1804年には国務相に就任している。彼はそれまで勲位局の事務局をサン-トレノ街の自宅に置いていた。なほこの勲位局は1802年5月20日に創設されている。勲位局はサルム館を377.671フラン94サンチームで購入している。この建物も1871年に放火されるが，それまでユード将軍の司令部が置かれていた。1872年から74年にかけ焼失した内部の再建工事が行われた。正面の浅浮彫は被害をうけず，創建当時の優美さを保っている。

19）prison de Sainte-Pélagie：第5区のラ・クレ街（商店の看板の鍵クレの画によるとの事だから，日本ならさしずめ鍵屋の辻か）56番地に在った。元は同名の修道院で，高等法院顧問官ド・ミラミオンの未亡人マリ・ボノーが不良少女の矯正施設として建設したのが起源。聖女ペラジはアンチオキアの人で，前半生の淫奔な生活を悔い，宗教活動に後半世を捧げたと伝えられる人物。

1792年，パリ・コミューヌ政府は，この建物全体を刑務所にする事を決定，男囚女囚を共に収容する政治囚の牢獄となった。約350名が収監されるが，鉄格子の小さな窓から僅かの日光しかさしこまない6ピエ（2米弱）四方の監房で，薄い藁蒲団，粗悪なマットとぼろぼろのシーツが支給され，何を入手するにも看守に法外な料金を請求された。またこの刑務所は1797年以降，暫くは不良青少年や借金返済不能者も収容された。しかしなんといっても有名な政治犯が多い。シャンソン作者ベランジェ，ポール-ルイ・クーリエ，アルマン・カレル，アラゴ，カヴェニャック，ラムネー，プルードン，ドレクリューズ，ブランキ，ジュール・ヴァレス，クレンソーなど多彩な顔触れである。

1893年，セーヌ県議会は，サント-ペラジ，ラ・ロケット，マザの三刑務所の廃止と，それに代るサンテとフレーヌ刑務所の増置増設を決定，1898年から取り壊し工事が開始され，現在では，かって6.248平米にわたって建っていたサント-ペラジ刑務所を偲ぶものは何一つ残ってはいない。

20）Raoul Georges Adolphe Rigault（1846－1871）：フランスの革命家，ブランキ主義者の新聞記者で，パリ・コミューヌの優秀な活動家の一人だった。パリ大学医学部に学んだが革命派の新聞に寄稿した論説やカトリック教会の僧侶と教会結婚への猛烈な非難演説のため禁錮4箇月と罰金刑の判決を受けたが，獄中でも革命的デモをして刑期が数か月延長された。更に1869年に創刊した社会主義新聞「民主」*Le Démocrate*の論文のため新聞は発行停止，彼はまた禁錮刑になった。1870年7月にも政府の行った国民投票反対のパンフレットにより禁錮刑を三度受けたのである。同年9月4日の革命で釈放されたリゴーは警視総監付の特別委員として革命派に潜入していた警察のスパイを摘発している。1871年3月18日，彼は警視庁付市民代表委員に任命され，ついで保安委員会代表としてヴェルサイユ派のスパイや破壊工作者たちを逮捕し大きな功績をあげ，反対派の中傷にも不拘，4月26日，コミューヌ政府の検事総長に任命された。彼はプルードン主義者を内部分裂を策す裏切者として処罰しようとしたが，ドレクリューズらの有力者が士気全体にかかわるとして反対，実現しなかった。しかし人質の裁判と処刑の実行は賛同を得，告発

委員会が作業を開始した。5月23日，彼の個人的な命令で何人かの有名な人質が銃殺された。翌24日，戦闘中にヴェルサイユ軍の捕虜になり，一士官により拳銃で射殺された。同日の24日，サント‐ペラジ刑務所でパリ大司教ダルボワ猊下を含め6名の人質が処刑され，ラ・ロケット刑務所では憲兵や司祭たち49名が虐殺された。しかしヴェルサイユ派も，5月23日，マドレーヌ寺院前でコミューヌ派兵士300名を処刑，翌24日はパンテオンで700名のコミューヌ派兵士を銃殺，相互の復讐合戦が血の週間の序章となった。

21）rue Gay-Lussac：第5区にあり，サン‐ミシェル大通りとピエール‐ランピュエ広場を結ぶ長さ625米，幅20米の道路。1859年開通，1864年に化学者，物理学者でエコル・ポリテクニックの教授でもあり代議士でもあったジョゼフ‐ルイ・ゲー・リュサック（1778－1850）の名が命名された。この通りの開通工事の時も，リュテスで最も小規模だが最古のローマ時代の公衆浴場thermeの遺跡が，1865年に，この通りとサン‐ジャック街の交叉点で発見されている。この通りの5番地の家の中二階に，ジョルジュ・サンドが1871年以降住んだ。この家がパリでの彼女の10番目で最後の家となった。

22）George Darboy（1813－1871）：フランスの高位聖職者。1863年にパリ大司教に就任。第1回ヴァティカン公会議において教皇無謬論の教義に反対したガリカニスム論者の代表の一人だった。パリ・コミューヌの乱の時，コミューヌ派の人質として逮捕され，サント‐ペラジ刑務所に拘留され，1871年5月24日，ボン‐ジャン裁判長他4名のイエズス会士と共に処刑された。コミューヌ派はヴェルサイユ派の捕虜となっているブランキ1人と交換しようとしていたのだが，ティエール首相がこれを拒否していたので，交換要員として無用になったためである。

23）rue du Chateau d'Eau：第10区にあり，マジャンタ大通りとフォーブール‐サン‐マルタン街を結ぶ長さ692米，幅12米から13米の通り。ヌーブ‐サン‐ニコラ街とヌーブ‐サン‐ジャン街を併合して，1851年から発足した。現在の名の起源は，当時シャトー‐ド（現在のレピュブリック）広場の近くから始まったためである。吸収されて消滅したヌーブ‐サン‐ニコラ街には，パリの死刑執行人として有名なサムソン一家が住んでいた。シャルル・サムソン（1740－1793）はルイ16世を処刑した事で特に有名である。その息子アンリは1840年に70歳で死ぬが，この間に時代の変遷はサムソン家を襲い，この豪邸も手放さなければならなかった。

24）rue Popincourt：第11区にありラ・ロケット街とヴォルテール大通りを結ぶ長さ430米，幅15米の道路。この道とヴォルテール大通りが交叉する辺りに，15世紀初頭頃

にポパンクールという小さな村落があった。普段はパンクール Pincourt と呼ばれていたこの土地一帯はパリ高等法院初代院長を務めた（1403－1413），ジャン・ド・ポパンクールの所有地だったという。ポパンクール街は，1652 年の記録によるとサン - タントワーヌ大修道院に至る街道の一部だったが，ヴォルテール大通りを挟んで向い合っているフォリ - メリクール街がその一部を吸収してしまったため現在のように短くなった。旧 78 番地にリヨン出身の人形師ジョスランが繰り人形の劇場を開設している。

文中のヴォルテール広場は現在のレオン・ブルム広場で，ヴォルテール大通り，ラ・ロケット街，パルマンティエ大通りの三叉路にある。創設時の 1857 年はユジェーヌ皇太子広場，1870 年にヴォルテール広場，1957 年からレオン・ブルム広場になった。1865 年 9 月，ここに第 11 区区役所が新築され，1871 年 5 月，パリ市庁舎が焼失した後にパリ・コミューヌが此処に司令部を設置した。

25）rue Haxo：第 19 区と第 20 区に跨り，シュルムラン街とセリュリエ大通りを結ぶ長さ 1.058 米，幅 15 米の街路。ベルヴィル村とプレ - サン - ジェルヴェ村を結ぶ旧村道だった。1834 年にヴァンセンヌ街とプレ - サン - ジェルヴェ街を合併し，ブノワ・アクソ将軍（1774－1838）の名をとって命名された。85 番地はシテ・ヴァンセンヌと呼ばれ café-concert が開業していたが，普仏戦争の 1870 年の間は閉店していた。この建物にパリ・コミューヌ派が最後の司令部の一つを置いた。コミューヌ派の部隊長エミール・ゴワ大佐が，1871 年 5 月 26 日，ラ・ロケット刑務所の囚人の中からイエズス会の司祭 11 名と憲兵 36 名を選んで連行して来た。18 歳の少女がプランシャ神父を打ち倒すと，殺戮が始まり，すべての人質が射殺された。1872 年，イエズス会がこの土地を購入し，ラ・ロケット刑務所が取り壊された時に監房の格子，ドア，錠前，床などを買い取り 5 つの独房を再現し展示し，また虐殺の詳細を記載した掲示板を設置した。人質を祭る礼拝堂が建立された（1936－1938）。現在では此の地を La Villa des Otagas と呼んでいる。

26）Buttes-Chaumont：butte は小さな丘の意。Chaumont は，Chauve mont「禿山」からの合成語か。現在はパリ第 19 区にある緑の美しい起伏に富んだ丘陵の公園だが（1860 年から 1867 年の間に建設），昔はパリ市の外れで，入市税徴収の柵門があった。この柵壁に沿って，パリの糞尿投棄が行われていた。またビュット - ショーモンの石灰石採掘後にできた巨大な穴や地下道が，ごみ捨場として利用されていた。しかしパリ市の美化を願っていたナポレオン 3 世は，新市街にふさわしい都市環境の整備の一環として，公園の新設を計画，市街地南部にモンスーリ，西部にブーローニュ，東にヴァンセンス，そし

て北部にビュット‐ショーモンをその候補地に選定したのである。

工事は1863年11月，パリ市建築局の主任技師でアドルフ・アルファンと造園主任バリエ・デシャンの監督の下に着工され，1865年6月に完成，同月28日にナポレオン3世はその完成式に出席している。サン‐マルタン運河から水をひいて中央に池をつくり，池の中央に半ば自然で半ば人工的な岩山を配し，その頂上にギリシャ神殿風の見晴らし台をつくり，総面積23ヘクタールの見事な公園が誕生した。コミューヌの乱の時は文字通りの荒れ果てた雑木山で，ゲリラ的死闘が展開された。

27）Victor Henri, marquis de Rochefort-Lucay，通称Henri Rochefort（1830－1913）：フランスのジャーナリスト，政治家。貴族の旧家だったが大革命で没落した家に生れた。父アルマンは正統王朝主義者で，シャンソンやヴォードヴィルを書いて生活していた。サン‐ルイ校卒業後，パリ大学の医学部に入学したが性にあわず退学，パリ市役所の事務員として勤務（1851－61）しながら詩や劇を書いた。ミルクール作『クールセル侯爵夫人』*La Marquise de Courcelle*（1858）の本当の作者はロシュフォールである。この間に新聞や雑誌に劇評などを寄稿してたが，1858年にジュール・ヴァレスと共に文芸紙*La Chrouique parisienne*を創刊している。次に『シャリヴァリ』の編集者となり，喜劇，オペレッタ，ヴォードヴィルを14本上演させ，また諷刺小説を書いて有名になった。1861年に市役所を退職してからジャーナリズムと演劇の世界で活躍，その辛口の評論で多くの敵をつくり，何度も決闘騒ぎを起した。「フィガロ」紙ついで「ソレイユ」紙へと変ったが，彼が在職している間の「フィガロ」はそれまでの政治的に無色な中立的立場から帝政攻撃の反政府的新聞に変貌し，遂に彼は「フィガロ」紙から退去せざるを得なくなった。1868年の新聞条例改正を利用し，彼は週刊誌「ランテルヌ」紙*La Lanterne*を創刊（1868），文学者たちの協力も得て第2帝政を猛烈に攻撃し大成功をおさめた。創刊号は，1868年5月30日に発賣され5萬部を賣り上げたのである。政府はすぐさま3号から街頭での販賣を禁止し，次に差し押え処分を行って弾圧，11号で発禁となりロシュフォールは禁錮1年罰金1萬フランの判決を受けた。1869年の選挙で共和派の代議士として当選し，*La Marseillaise*紙を創刊，ルイ・ナポレオンの子ピエール・ボナパルトと論争，その結果，彼の代りに決闘に向ったヴィクトール・ノワールがピエール・ナポレオンに射殺されるという悲劇が生じたのである。彼は13箇月の禁錮刑を受けサント‐ペラジ刑務所に服役中，第2帝政の崩壊で釈放され，国防政府の一員となった。しかしパリ・コミューヌに共鳴した彼は11月1日に辞任，ヴェルサイユのティエール側に対して弾劾

キャンペーンを展開した。彼はパリ・コミューヌに参加していなったが，乱の終結後に共犯者としてニュー・カレドニヤに終身流刑の判決を下された。1871 年から 3 年間流刑地で過した後の 1874 年 3 月に同志と脱走に成功，ロンドンで「ランテルヌ」紙を再刊した。1880 年の大赦で帰国，すぐさま「非妥協」誌 *L' Intransigeant* を創刊した。この誌上の罵詈雑言はすさまじく度々裁判沙汰になったが，このために雑誌は名声を保ったのである。しかし彼の急進主義は次第に過激なナショナリズムに変貌，1888 年に議員に再選されたが翌年に辞職し，危険を顧みずブーランジェ将軍支持運動に没頭し，高等裁判所から欠席裁判で終身流刑の判決を受けた（1889）。彼はイギリスに亡命し反政府活動を続け，1895 年の大赦で帰国した。年老いた姿を再びパリに現わし，反ドレフュス派としてナショナリストたちと共闘し，クレマンソーに対抗した。彼は多くの作品を残したが，主要なものは『退廃のフランス人』*Les Français de la décadance*（1866），『帝国の街燈』*Les Lanterns de l' Empire* 3 巻（1864），『遭難者たち』*Les Naufrageurs*（1876），『ビスマルク嬢』*Mademoiselle Bismark*（1900）などである。

28）Pierre-Clément-Eugène Pelletan（1813－1884）：父が公証人，母は新教徒の家に生れ，法律の勉強のため上京したが（1833），すぐに文学，哲学，社会科学に没頭，1836 年に *La Nouvelle Minerve* に評論を発表しジャーナリストとしてデビューした。2 年後，ジラルダンに誘われ，*La Presse* に入社，「無名士」un inconnu のペンネームで，哲学，歴史，社会問題，詩，芸術などの評論を掲載，自由と進歩に対する新鮮な趣向を熱気溢れる文体で表現した。1848 年の 2 月革命に際しラマルチーヌと共に市庁舎に赴き，第 2 共和政樹立に参加，政界入りを勧誘され故郷のシャラント－アンフェリュール県から立候補したが，彼の主張する共和主義が余りにも極端にみえたため，落選してしまう。ラマルチーヌが創刊した *Le Bien Public* に協力した後 *La Presse* に復帰，カトリック紙の *L'Univers* と社会主義者を相手に論争した。彼はルイ・ナポレオン大統領のクー・デタ（1851.12. 2 .）の後，*Le Siècle* と *L'Estafette* を経て，再び *La Presse* に帰った。1852 年彼は大作『19 世紀の信仰告白』*La Profession de foi du XIX*^{e} *siècle* を刊行，人間性と進歩に対する彼の理念を発表した。1860 年ペルタンは『流れ星ベランジェ』*Une étoile filante, Béranger* を世に問い，3 年前に死去したこの「国民詩人」poète national がナポレオンの偉業を誇大に宣伝し国民を盲目にして帝政を再現させた罪は大きい，と断罪した。これに対しベランジェ支持派から猛烈な反論と攻撃が在り，論戦が展開された。1864 年から 70 年までペルタンは立法院に在籍し，第 2 帝政に対し苛烈な批難を繰り返した。

帝政崩壊後，国防政府の一員となり，1871 年の選挙でブッシュ‐デュ‐ローヌ県より代議士に選出され国民議会に入った。彼は共和主義左派に属しティエールを支持したが，パリ・コミューヌの悲劇を見てから彼の体内で激情が消えた如く，それ以後はほとんど公的な場での発言はなくなった。1876 年 1 月に元老院議員になった。「ペルタンとかいう男は，イタチが汚水にもぐりこむように，文学に入ってきた」と，サント‐ブーヴは『わが毒』*Mes poisons* の中で皮肉っている。主要作品は『1848 年 2 月の 3 日間の歴史』*Histoire des trios jours de Février 1848*（1848），『19 世紀の信仰告白』*La Profession de foi du XIX*^{e} *siècle*（1852），『人間の諸権利』*Les Droits de l'homme*（1858，1867），『19 世紀の女性』*La Femme au XIX*^{e} *siècle*（1869）などがある。

29）Henri Marmottan（1832－？）：ヴァランシエンヌ出身の医師，政治家，1858 年から 66 年までパリで医師として働き，次に博物史の研究に入る。1870 年 10 月 6 日，パシー区助役に任命され，翌年 3 月 18 日以降にパリ・コミューヌに参加を求められるが辞退している。1876 年 2 月 20 日，立法議会選挙で，マルモタン医師は，第 16 区選出の議員に選出された。議会では共和政のために真剣に投票した。1877 年 2 月 14 日，エイロー大通りの政治宴会において彼は完全な大赦令を要求し，次のように述べた。「代表各位の責務は未だ重いものです。あらゆる抵抗を押え，政治的配慮により内戦の最後の汚点を消去しなければなりません。そしてその配慮は可能な政府を名誉あらしめるでしょう。スペインではすでにこの事は実行されました。私たちはスペイン人より偉大でなく寛容でもないのでしょうか？」1877 年 10 月 4 日の選挙で彼は再選される。

30）Théodre Duret（1838－1927）：評論家，ジャーナリスト。シャラント‐アンフェリュール県サントの生れ。1863 年の選挙に故郷の町から立候補するも落選，投票結果を『選挙に関する手紙』*Lettres sur les élections* として刊行した（1863）。政治から転向するため美術を研究，『1867 年のフランスの画家』*Les Peintres fançais en 1867* を発表した（1867）。資産家だった彼はパリに出て共和派の新聞 *La Tribune* を創刊（1868），ペルタン父子たちに寄稿してもらう。新聞社の代表として彼は帝国政府と一度ならず悶着を起し，特にバリケード上で戦死した代議士ボーダン（1851 年 12 月 3 日死亡）の記念碑建設募金の時に特に烈しく論争した。パリ攻囲中，彼は第 9 区の区長を務めた。1871 年から 72 年にかけ，イタリヤ人の銀行家 Enrico Cernuschi（1821－1896）に同行，日本，中国，モンゴル，セイロン，インドを周遊する旅行をし，『アジア旅行記』*Voyage en Asie* を出版した（1874）。これは当時としてはアジアの姿を最も適確に紹介した著書であっ

た。歴史関係の著作として，『帝国の崩壊』*La Chute de l'Empire*（1876），『国防』*La Défense nationale*（1878），『ラ・コミューヌ』*La Commune*（1881），美術評論として『印象派の画家たち』*Les Peintres impressionistes*（1878）などがある。また『前衛批評』*Critique d'avant-garde*（1885）では，マネと印象派，北斎，ホイッスラー，ワグナー，ショーペンハウエル，ハーバード・スペンサーなどの思想と芸術を紹介している。本文中の引用は恐らく『ラ・コミューヌ』からであろう。

31）Clémence Louise Michel（1830－1905）：フランスの革命家。オート－マルヌ県で貴族の私生兒として生れた。モンマルトルの小学校教師をしている時，普仏戦争が勃発，彼女は看護士となってパリ攻囲中は負傷兵の看護に当った。第1次インターナショナルに加盟，パリ・コミューヌが成立すると積極的に活動に参加，モンマルトル防衛の第1線に立って奮戦，「赤い乙女」Vierge rouge に数えられた。コミューヌの敗北後，追求を逃れて家に辿りつくと母がヴェルサイユ派の部隊に連行されたのを知り，母を釈放してくれるよう自分が身代りになるため自首している。彼女はニュー・カレドニヤへ流され（1871），1880 年の大赦令で帰国。無政府主義に賛同し，暴利を貪ると怨嗟の的だったパン商の店を襲撃する暴動を指導し，逮捕され 10 年の刑を宣告される（1883）。赦免されると（1886），ロンドンで反政府宣伝に従事（1895 年まで），帰国後は再び革命運動を続行した。彼女はフランスの革命運動の歴史のなかで最も共感を与える人物だった。彼女は，演説，小説，詩など多彩な作品を残したが，主要作品は『回想録』*Mémoires*（1886），『ラ・コミューヌ』*La Commune*（1898）で，パリ・コミューヌの内乱の実情を生々しく伝えている。彼女はまた何本かの劇を上演させている。

補注1） rue Myrrha：第 18 区にあり，ステファンソン街とクリスチャン街を結ぶ，長さ 610 米，幅 9 米から 12 米の道路。ラ・シャペルとモンマルトルの旧村道。1841 年にステファンソン街とポワソニエール街を結んで開通したが，ポワソニエール街とクリニャンクール街を結ぶフレデリック街ができると（1847），1868 年にこの街路と連結して完成，最初の名前コンスタンチーヌ街からミラ街に変更になった。ミラとは旧モンマルトル区長のビロンの娘の名である。テキストには rue Mirha とあったので，探しあぐねたが，ドムブロムスキーを調べているとき，正確な綴りの rue Myrrha を発見した次第で，補注とした。

（続　く）

（追　　記）

（1）参考図書などは，〔Ⅰ〕の巻末に掲載しておりますので，そちらを御参照下さい。
但し本稿執筆に当っては，下記の著書を特に参考にいたしました。

ア・イ・モロク編，高橋勝之訳
『パリ・コミューヌ』大月書店刊，1974 年。

大仏次郎著
『パリ燃ゆ』2 巻，朝日新聞社刊，昭和 39 年。

（2）　前稿〔XXVI〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p．1．下から 3 行目　　フランス座
p．3．上から 8 行目　　アメリカ人
p．6．下から 2 行目　　更新→行進
p．14．下から 14 行目　　観兵式
p．19．下から 2 行目　　協会

── 2007．9．11──